大学入試研究ジャーナル第 35 号, 327-332, 2025

高大接続事業「心理学体験授業」の効果

山田 恭子，川端 ひなた，田中 寛二，高良 健作（琉球大学）

本研究では，琉球大学で開催した高大接続事業「心理学体験授業」の内容を紹介し，その効果を検証する。体験授業の内容には，心理学の歴史，研究法，分野等についての講義，実験，面接の体験，学生との交流が含まれる。結果として，やる気の向上，心理学へのイメージの肯定的方向への変化，心理学科系への進学意識の向上が見られた。これはこれまで実施してきた医学部体験授業と同様の結果で，医学部ほど職業選択に直結しない学問分野でも，このような体験授業は効果を持つことが示唆されたと言えるだろう。

キーワード：高大接続，高大連携，キャリア教育

1 はじめに

1.1 琉大にぬふぁ星講座の意義とこれまでの講座

中央教育審議会（2014）による答申以降，各大学では継続的に様々な高大接続事業が行われている。琉球大学では，高大接続事業の一環として琉大にぬふぁ星講座を実施している。琉大にぬふぁ星講座は，特定の学問分野を目指す高校生がその分野においてより高い目標を掲げ，そこに向かって継続的に努力できるようになることや，将来のキャリアプランを具体的に描けるようになることを目的として平成 30 年度に創設された。これまで，医学科を目指す高校生のための講座である医学部体験授業を開催している。なお，にぬふぁ星は沖縄の方言で北極星を意味し，沖縄の民謡の中で，人生の目標を意味する言葉としても歌われる。そのため，講座名として採用した。

医学部体験授業は，医学部の実際の実習，講義や最先端の研究，キャリアについてのレクチャー，医療倫理についてのディスカッション，医学部生との交流等を 2 日から 5 日間に渡って実施する。参加者はすでに医学科への進学，そして医師になることを念頭においた生徒であった（山田ほか，2023）。その成果として，受験へ向けての動機づけの高まり，医師や医学部へのイメージの変化，キャリアプランの変化等の効果が得られ，さらにその効果が継続することも示唆されている（山田ほか，2024）。このような効果は，最終的には大学入学後のミスマッチの防止やバーンアウトの防止，人生における目的意識の向上等にも繋がる可能性を持っていると考えられる。

キャリア教育の一環としても，琉大にぬふぁ星講座は役立つ可能性がある。中央教育審議会（1999）による答申にて，学校教育の中で「キャリア教育」が登場して以降，学校教育者は，キャリア教育とは進路を選択するために必要な教育であると解釈した（松永，2017）。また，松永（2017）によると，キャリア教育とは，「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに，自己の個性を理解し，主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義されている。琉大にぬふぁ星講座のような体験授業等を通して進路選択後にどのような学び，どのような将来があるのかを知ることは，主体的な進路選択を行い，将来的に望ましい職業観や勤労観，職業に関する知識や技能を身に付ける第一歩にもなりうると考えられる。

1.2 目的

医学部体験授業の参加者は，上述したようにすでに医学科への進学や医師になることをある程度決めているという特徴があった。そのため，イメージやキャリアプランの変化の内容も「どのような医師になるか」「臨床医だけでない医師の存在を知ったので，どちらを目指すか考えた」といったように医師を前提としたものが多かった。このことから，参加者は職種の選択をすでに行っていたと言える。しかしながら，多くの一般的な高校生にとって，職業選択はまだ非常に流動的であり，先のことであるため検討すらしていない者も珍しくない。そこで，より一般的な高校生の実態を反映するために，医学科ほど職業選択に直結しない他の学問分野において琉大にぬふぁ星講座を行った場合にどのような効果が得られるのかを，アンケートを通して検証することとした。

1.3 対象とする分野を心理学とした理由

対象とする学問分野は，心理学とした。大学で心理学を学んだ学生は大学院を修了後，公認心理師等の資格を取得し，病院，学校等で専門職として働くこともできる。その一方で，大学卒業後心理学とは直接関係

のない職業を選択する者も多数いる。例えば，琉球大学人文社会学部人間社会学科心理学プログラムの卒業生は，公認心理師等の資格取得のために大学院に進学する者だけでなく，沖縄県内の官公庁等の公務員，様々な分野の一般企業に就職する者もいる（琉球大学，2024）。医学部と比較すると卒業後の職業選択に幅があることがわかる。

また，心理学は一般的なイメージと大学での学び，研究，職業にずれが大きい分野と言える（日本心理学会，2018）。医学部体験授業を立ち上げる際にも医学部の教員からは「想像以上に医学部のことを知らないまま進学をしていると言わざるを得ない」という声が挙がっていたが，心理学においても同様もしくはそれ以上のずれが生じている可能性は高い。このようなずれが生じたまま大学に入学してしまうと，ミスマッチや，それに伴う動機づけの低下，退学等のリスクが生じやすくなる。また，職業選択時にも影響が出る可能性がある。そのため，高校の段階で大学の実際の学びや職業の選択肢をなるべく多く知っておくことは，リスクを軽減することにつながるだろう。

1.4 検証方法の概要

本研究では，心理学体験授業の効果を，満足度，受験へのやる気，心理学へのイメージの変化，進学意識の変化を主な指標として検証する。これらを検証するために，事前と事後でアンケートを実施する。体験授業前のアンケート（以下，事前アンケートとする）では高校生が知っている心理学の分野を問う。体験授業後のアンケート（以下，事後アンケートとする）では満足度，受験へのやる気の変化，心理学へのイメージの変化，進学意識の変化について直接問うこととした。進学意識の変化は，進路選択の準備にあたると考え，主体的な進路選択に関する項目として設定した。

2. 心理学体験授業の内容

2.1 開催日時

2023 年 11 月 3 日（金，祝日）に開催した。時間は午前 9 時から午後 5 時までであった。

2.2 参加者

参加者は高校 1 年生と 2 年生 13 名であった。性別は男性 1 名，女性 12 名であった。

2.3 スケジュールと内容

当日のスケジュールと内容の概要を表 1 に示した。担当教員等が自己紹介を行った後，1 時間目の「心理学とは」では，講義に先立ち，参加した高校生が心理学のどの領域に関心を持っているかを調べるため，5 分程度時間をとり，事前アンケートを実施した。講義では，心理学が科学として成立するまでの歴史や，一般的なイメージ以上に様々な領域が存在することを伝えた。

表 1 心理学体験授業のスケジュールと内容

	内容
9 : 00 –	挨拶・自己紹介
9 : 10 –	1 時間目 講義「心理学とは」
10 : 10 –	2 時間目 講義「心理学の研究方法」
11 : 10 –	3 時間目 実験「錯視」
12 : 00 –	昼休憩
13 : 00 –	4 時間目 討論 「実験結果の解釈と発表」
14 : 00 –	5 時間目 講義「臨床心理学とは」
15 : 00 –	6 時間目 演習 「面接（カウンセリング）を体験」
16 : 00 –	7 時間目 まとめ「座談会と振り返り」
16 : 50 –	挨拶・修了証授与

2 時間目の「心理学の研究方法」では，心理学の科学的な研究方法を紹介した。その中で統計的検定の基本や，心理学の代表的な研究方法である実験法，調査法，観察法，テスト法（検査法），事例研究法について紹介し，それぞれの方法を用いた研究等も併せて紹介した。

3 時間目の「錯視」では心理学の代表的な実験の 1 つである錯視を取り上げ，実際に実験を行った。実験はいくつかのグループに分かれて行い，実験を行った後に，心理学を学んでいる学部生，大学院生がサポートに入って結果をまとめたり，結果の考察を行ったりした。4 時間目の「実験結果の解釈と発表」ではグループごとに 3 時間目に行った実験の結果を報告し，考察したことを発表した。

5 時間目の「臨床心理学とは」では，心理学の中でも人気の高い領域である臨床心理学について，その歴史や定義，携わることができる仕事の分野，資格，対象者や研究方法等について幅広く講義を行った。6 時間目の「面接（カウンセリング）を体験」では臨床心理学で用いられる研究法の 1 つである面接を体験した。臨床心理学の領域における面接の定義やポイントを解説した後，2 名で 1 組となり，実際に面接を行った。面接後には学部生，大学院生を交えて意見交換，振り返りを行った。

7 時間目のまとめ「座談会と振り返り」では，高校生に対して疑問に思ったことや今後心理学についてもっと学びたいか等の問いを投げかけ，学部生，大学院生と自由に討論させた。最後に修了証を手渡した。

このスケジュールと内容の特徴は，数時間ではなく，丸 1 日かけて心理学の基礎的な知識を学べること，実験や面接といった心理学の基礎的な研究手法を体験できること，実際に心理学を学んでいる学生と協働することで，心理学の実際のところを知ることができることにある。これらの内容はこれまで行ってきた医学部体験授業の内容を参考にして構成した。

2.4 アンケート

効果の検証は事前アンケートと事後アンケートを用いて行うこととした。

2.4.1 事前アンケート

事前アンケートは 1 時間目の授業冒頭に 5 分程度時間をとって，紙に書かせる形で行った。アンケートは，高校生がどのような心理学に興味を持っているのかを知るために実施した。内容としては，まず 1）知っている心理学の領域を「〇〇心理学」の形でできるだけ多く書かせた。次に，2）その中で最も興味がある領域を選ばせた。

2.4.2 事後アンケート

事後アンケートは講座終了後に QR コードを配付し，Google Form で作成したアンケートに回答するように求めた。QR コードは持ち帰って回答することも可能とし，約 1 週間後に締め切った。事後アンケートは「あなた自身について」「体験授業について」「進路について」の大きく 3 つのセクションから構成されていた。

「あなた自身について」のセクションでは学年と性別を尋ねた。

続く「体験授業について」のセクションは，以下の 6 つの問い 1） 体験授業の満足度と良かった点，改善点 2） 体験授業で新たに提供するとよいと思う内容 3）参加しやすい時期 4）やる気が参加前と比較してどのように変化したか 5）心理学へのイメージが参加前と比較してどのように変化したか 6）感想 から構成された。

1） の満足度は「とても良かった」「どちらかというと良かった」「どちらかというと良くなかった」「とても良くなかった」の 4 件法で回答させた。4）のやる気は「とても上昇した」「どちらかというと上昇した」「変化はなかった」「どちらかというと低下した」「とても低下した」の 5 件法で回答させた。5）の心理学へのイメージについては「とても良いものになった」「どちらかというと良いものになった」「変化はなかった」「どちらかというと良くないものになった」「とても良くないものになった」の 5 件法で回答させた。

3 つ目のセクション「進路について」のセクションは以下の 6 つの問い 1） 現在の志望（心理学系学科等かどうか） 2）心理学系学科等を志望する理由 3）心理学系学科等への進学意識が参加前と比較してどのように変化したかとその理由 4）志望校について 5）希望する入試区分 6）琉球大学の心理学プログラムへの進学意識とその理由 で構成されていた。

2）の心理学系学科等を志望する理由は「カウンセリング（臨床心理）について学びたい」「資格（臨床心理士，公認心理師等）を取得したい」「心理学の研究や実験をしたい」「その他（自由記述）」の中から選択させた。この回答は複数選択可とした。3）の進学意識については「とても進学したくなった」「少し進学したくなった」「あまり進学したくなくなった」「全く進学したくなくなった」の 4 件法で回答させた。6）琉球大学の心理学プログラムへの進学意識については「もともと進学するつもりで，今でも進学しようと思っている」「もともと進学するつもりではなかったが，今は進学しようと思っている」「もともと進学するつもりだったが，今は進学しようとは思っていない」「もともと進学するつもりではなく，今でも進学しようと思っていない」の 4 件法で回答させた。

3 結果

効果の検証は，事前アンケートと，事後アンケートの一部の結果を用いて行った。

3.1 事前アンケートの結果

事前アンケートには参加者 13 名全員が回答した。知っている心理学の領域の回答数は平均 5.9 個（*SD* = 2.8）であった。回答内容は「臨床心理学」が 11 名と最も多く，次いで「犯罪心理学」10 名，「教育心理学」9 名，「認知心理学」8 名，「社会心理学」「環境心理学」5 名と続いた。ただしこれらの領域はいずれも最初に行った教員・学生の自己紹介で言及があった領域であるため，その影響を受けている可能性がある。他の一般的と考えられる領域（向井，2016）である「発達心理学」「生理心理学」は 2 名，「学習心理学」「知覚心理学」は 1 名と，あまり知

られていないようだった。一方で学術的にはほとんど使われない「恋愛心理学」が 3 名おり，高校生の認識と実際の心理学にはややずれがあると思われる。

3.2 事後アンケートの結果

事後アンケートには 7 名が回答し，回答率は 54%であった。事後アンケートはその場で回答するだけでなく，持ち帰った後の回答も可能としたため，回答率が 54%にとどまったと考えられる。事後アンケートの結果は目的に応じたもののみを抜粋して以下にまとめた。

3.2.1 満足度

授業全体の評価では 7 名全員が「とても良かった」と回答した。その理由としては「実験や面接などが実際に体験できたこと」が最も多く，他に「大学生や他の高校の生徒との交流」「卒業後進路についての説明」等が挙げられた。

意見や感想の自由記述では「面接が難しかった」「錯視に驚いた」といった実習で気づいたこと，「質問がないか都度確認していたのが良かった」といった体験授業の進め方に関すること，「研究方法（2 時間目）の内容がわかりにくかった」「臨床心理以外はどんなものなのか謎が深まった」といった授業の内容に関するものが挙げられた。

3.2.2 受験へのやる気の変化

受験へのやる気の変化では「とても上昇した」と回答した者が 3 名，「どちらかというと上昇した」と回答した者が 4 名であった。変化しなかった者やネガティブな方向へ変化した者はいなかった（図 1）。

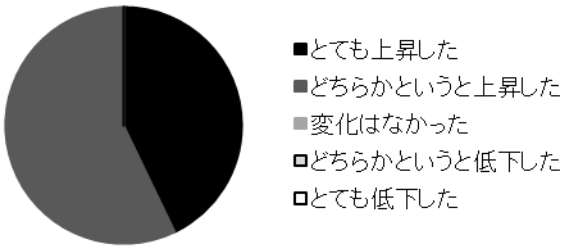

図 1 参加後の受験へのやる気

3.2.3 心理学へのイメージの変化

心理学へのイメージの変化では「とても良いものになった」が 1 名，「どちらかというと良いものになった」が 6 名であった。変化しなかった者やネガティブな方向へ変化した者はいなかった（図 2）。

イメージが具体的にどう変化したかについては，「心理学の分野がたくさんあることを知った」といった内容の回答が最多であった。その他にも，「思ったよりも難しくないと思った」，「心理学の基礎がわかり，あやふやなイメージが払しょくされた」といった心理学自体へのイメージの変化だけでなく，「病院で勤務できることあるいは保健所で働けることがわかった」といったようなキャリアに関する記述も見られた。

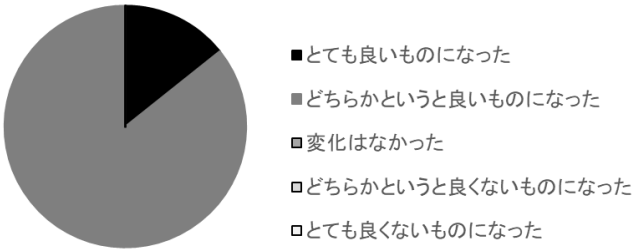

図 2 参加後の心理学へのイメージ

3.2.4 進学意識の変化

心理学系学科への進学意識の変化では，「とても進学したくなった」が 5 名，「少し進学したくなった」が 2 名であった。進学したくなくなった者はいなかった（図 3）。

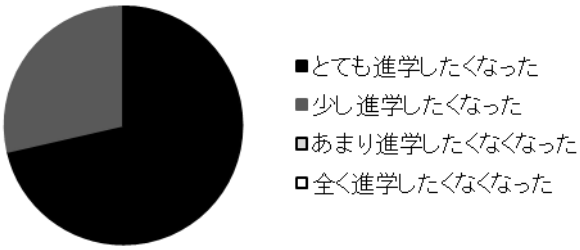

図 3 心理学系学科への進学意識

また，現在の志望としては「心理学系の学科」が 5 名，「迷っている」が 2 名であった。心理学系以外の学科を明確に志望している者はいなかった。迷っている者が心理学以外に志望している学問分野としては，看護が挙がった。その他，心理学系の学科を志望している者も，心理学以外に養護教諭，医学，総合政策系等を検討していた。

心理学系の学科を志望する理由（複数回答可）は

「カウンセリング（臨床心理）について学びたい」が 5 名，「資格（臨床心理士，公認心理師等）を取得したい」が 4 名，「心理学の研究や実験をしたい」が 3 名，「その他」が 2 名（「人生において役立つと思うから」，「保健所で働いてヤングケアラーの子供たち，誰かに相談できない方々に寄り添える人になりたい」）であった。また，その中から最も重要視するものを選ばせると，「カウンセリング（臨床心理）について学びたい」が 3 名，「資格（臨床心理士，公認心理師等）を取得したい」が 2 名，「心理学の研究や実験をしたい」が 1 名，「その他」が 1 名（「人生において役立つと思うから」）となった（図 4）。

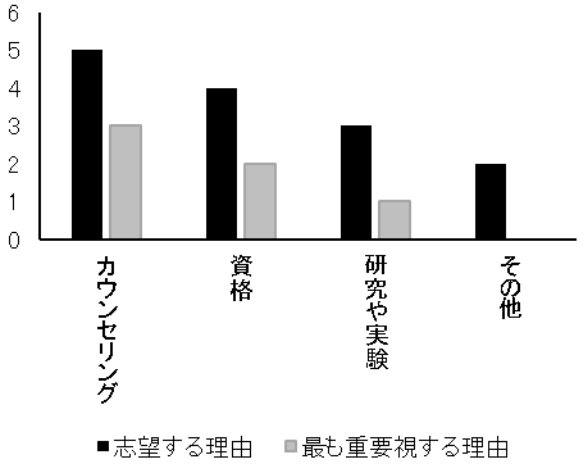

図 4 心理学系学科を志望する理由（複数回答）とそのうち最も重要視する理由

4 まとめと今後の課題

本研究では，心理学体験授業の内容を報告し，その効果を検証した。事前アンケートと事後アンケートの結果は，心理学は医学部と比較して職業選択の幅が大きい分野にも拘らず，これまで実施してきた医学部体験授業で得られてきた結果とほぼ同様であった。ただし，事後アンケートの回答率は 54 %であるため，参加者全員の状況を反映しているわけではないことに注意が必要である。得られた結果の詳細は，心理学へのイメージの変化，やる気，進学意識の順に以下に示した。

4.1 心理学へのイメージへの変化について

事前アンケートから，高校生の心理学のイメージと実際の心理学にはややずれがあることが明らかになった。体験授業では心理学の歴史や分野について講義を行ったり，実験も行ったりしたところ，参加者の心理学へのイメージに変化が起こったことがわかった。その変化は良い方向への変化であるとともに，多くの参加者が心理学の分野が多岐に渡ることを認識できていた。

一般的なイメージと大学での専門的な教育との間のずれを知らないまま進学してしまうと，ミスマッチにつながり，最終的に退学となってしまう可能性もある。体験授業にてこのずれを是正できたことは，ミスマッチを防止するための第一歩となると考えられる。

また，全国に心理学系の学部学科等を有する大学は多く，それぞれに強みがある。多くの分野があることを認識できていれば，大学を選択する際に学力だけではなく，自分が希望する心理学の講座がある大学を選ぶ等，新しい指標を持つことにつながるだろう。

4.2 やる気について

やる気は事後アンケートに回答した全ての参加者が向上したと感じていた。これは実際の心理学の学びを見聞きしたため，より鮮明なイメージが描けるようになったことによる効果であると考えられる。このやる気の向上を一時的なものにせず維持するためには，効果的な目標を持つことが重要である。Locke（1968）によると，効果的な目標の原則は明確で，適度に困難度が高いこととされている。体験授業の講義や実験，面接の体験，そして学生との交流は鮮明なイメージを描くことに寄与し，目標の明確化にも繋がる可能性があるだろう。

4.3 進学意識について

進学意識は，主体的な進路選択の準備であると考え，キャリア教育に関連する指標として設定した。アンケートに回答した全ての参加者が心理学系学部学科への進学を志望するようになっていたが，一部の参加者は心理学を志望しつつも他の分野と迷っていた。心理学を志望する理由を見てみると，心理学自体を学びたいという理由以外にも，卒業後の職業についての記述が見られた。回答者はごく少数であったが，この体験授業によって，大学卒業後のキャリアまで検討できるようになったことを示唆する結果である。今後は心理学を学んだ学生の活躍の場を紹介することによって，高校生のキャリア意識により効果をもたらすことができるだろう。

4.4 今後の課題

以上のように，体験授業を通して心理学へのイメージの変化，やる気，進路意識について肯定的な効果

が得られたが，課題が残されている。

第一に，参加者が限られていたことである。今回の参加者は 13 名，事後アンケートに回答したのは 7 名であり，肯定的な効果を得ることができたが，効果の一般性に疑問が残る。同様の体験授業は 2024 年度にも実施する。アンケートを継続的に実施し，多くのデータを集積することで，今回得られた結果を補強していきたいと考えている。

第二に，効果の継続性である。今回の体験授業のような取組に参加すると，参加直後は効果が得られてもその効果が持続しない可能性もある。今後は，その効果が持続しているのか，参加者に追跡調査を行う。具体的には，効果の継続を問うアンケートや参加者にインタビュー調査を行ったりすることを計画している。

第三に，より広くこの効果を広めることである。心理学への進学を志望する高校生の数自体は決して少なくはない。今回の参加者は体験授業に参加を希望するほど意識の高い生徒であると言えるだろうが，それでも心理学へのイメージと実際の心理学とのずれがあることがわかった。このずれが将来的なミスマッチを生む可能性を持っているなら，このずれを広く解消する方法を検討しなくてはいけなくなる。心理学に限らず，多くの学問分野でこのようなずれは生じているであろう。大学側が情報提供するとともに，高校生だけでなく高校教員や保護者らにもイメージだけではなく，正しい情報を得るという意識を高めてもらえるような機会を作らなくてはならないのかもしれない。

今後は，以上のような改善点を踏まえつつ，より多くの学部で体験授業を開催することで，よりよい進路選択とその後の充実した人生のきっかけをより多くの高校生に提供したいと考えている。

参考文献

中央教育審議会 (1999). 「初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (2024年4月1日)

中央教育審議会 (2014). 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現にむけた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について―すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために―（答申）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (2024年4月1日)

Locke, E. A. (1968). “Toward a theory of task motivation and incentives”, Organizational behavior and human performance, **3**, 157－189.

松永繁 (2017). 「日本におけるキャリア教育と課題―キャリア教育の先行研究からの検討―」『敬心・研究ジャーナル』, **1** (1), 27－36.

向井希宏 (2016). 「心理学概論」ナカニシヤ出版.

日本心理学会（監修）楠見孝（編） (2018). 「心理学って何だろうか？―四千人の調査から見える期待と現実」 誠信書房.

琉球大学 (2024). 「琉球大学人文社会学部人間社会学科心理学プログラム」 https://www.hs.u-ryukyu.ac.jp/ningenshakai/psychology/ (2024年 11月1日)

山田恭子・高山千利・清水千草・田崎優里・浦崎直光(2023). 「医学部志望者を対象とした高大接続事業「医学部体験授業」の実施と成果」『大学入試研究ジャーナル』, **33**, 100－105.

山田恭子・高山千利・清水千草・田中寛二 (2024). 「高大接続事業「医学部体験授業」の効果の持続の可能性」『大学入試研究ジャーナル』, **34**, 175－181.